

港

昼にはたゆとう海を光の涙と
夢みてかすむ浜辺
遥かなるは憧れに満ち足りた鏡か
今は既に唇をかみしめて
苦い砂
モチーフは髪を吹き
群れなして下らぬ仮面は
我が歩む足をと
抹殺の閃光が消えて後
耐えきれず涙に膝をつく
どんなにしてもただ独りを強いられ
疲れが消え去ることのうとましく
耐え難い波のうねり
ああ、海よ、干上がるがいい
慈愛よ、死に絶えるがいい
破戒の後悔が浜昼顔にうなだれ
生命の重量へ空しい眩き
阿呆面した俗人どもが俺を笑う
自惚れた、知ったかぶりだ、と
背負いきった者達の辛い結論は
「結局、人生は生きるに価するもの」
俺も歩き出そう、海へと
呑み込むがいい、その深さへと

(1984.12.27)